

D-12 児童の家族に関する認識の発達的研究 II
愛知教育大 ○中村喜美子 久世妙子

目的 前報では、2、4、6年生の児童の家族に関する認識の発達のな変化を調べた。本研究では、児童の親（家庭における主たる育児担当者）に同内容の質問紙調査を行い児童と親との認識のずれと、親の育児態度や意識について調べた。

方法 (1)対象：第1報の児童の親。回収数は2年生195名、4年生177名、6年生133名、計505名で、回収率は90.7%であった。(2)調査時期および方法：全児童に対する調査終了後、担任を通して家庭に質問紙を配布し、一週間後に回収した。

結果 (1)児童と親との認識のずれについては、①家族の年齢・職業の認知、②児童の家事分担、③家族の家事分担の認知について比較した。親の記述にくらべ、児童は具体的で日常生活との関連でとらえている。特に家族の家事分担については、親の記述にもあいまいさが目立った。

(2)育児について親の重視する項目は、①健康、②規律正しい生活習慣、③良い性格、④きょうだい助け合うこと、⑤勉強、⑥友人関係、⑦おてつだいの順であり、特におてつだいをあげるものは回答者の8.9%と少なかった。児童の年齢による差は、勉強と友人関係で顕著であった。